

二〇二四年度

第二回 入学試験問題

国語（五十分）（全十一ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはつきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。

一 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 明日は、弟のタンジ^{タンジ}ョウ日だ。
- (2) 私は、キカイ^{キカイ}の修理をする仕事に就^ついている。
- (3) サイバン^{サイバン}員制度が始まっておよそ十五年がたつ。
- (4) そろそろ薬^{いすい}がキいてくるころだ。
- (5) ショクム^{ショクム}内容を確認する。

二 次の文を意味が通るように並べかえたときに、使わない言葉を一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) ㊶した ㊵夜の ㊴降った ㊳雪は ㊲真っ白に ㊱間に
㊰続いて ㊯の辺りを
- (2) ㊶多くの ㊵読まれている ㊴その ㊳今でも ㊲人に
㊱作品は ㊰楽しんでる
- (3) ㊶射^せしこんできた ㊵中に ㊴明るい ㊳暗闇^{くらやみ}を ㊲洞窟^{どうくつ}の ㊱光
が ㊰一筋
- (4) ㊶飛んで ㊵鳥が ㊴遠くに ㊳船や ㊲見えた ㊱白い
㊰赤い
- (5) ㊶オムライスだ ㊵私が ㊴包んだ ㊳好きなのは ㊲卵で
㊱あるいは ㊰チキンライスを ㊴料理 ㊵つまり

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の九月、「わたし」(花岡沙弥^{せや})は二年半住んでいたマレーシアから帰国し、日本の中学校に転入学した。ある日、「督促女王^{せつそく女王}」と呼ばれている三年生の佐藤先輩^{さとうせんぱい}に呼び出され、無理やり短歌の吟行に連れていかれる。戸惑い^{とまじり}つつも、短歌を作ることに魅力を感じた「わたし」は、毎週木曜日^{もくようび}に吟行の約束をした。しかし、木曜日の放課後、約束の場所に行っても佐藤先輩の姿はなかった。

翌日の昼休み、佐藤先輩は図書室の書架^{しょか}の整頓^{せいとん}をしていた。

「昨日、吟行するんじゃないかったですか？」

わたし、待ってたんですけど、ということをお願いするように、わたしは少しa口をとがらせた。

「もう行かないよ。」

「えっ？」

「花岡さんと吟行はしない。」

佐藤先輩はわたしのほうを見ず、本の背ラベルに目を向けたまま言った。

「わたしといるところを見られるの、嫌^{いや}なんですよ?」

ああ。

昨日の給食の時間、自分の口から飛び出た言葉を思い出す。

『無理やり連れていかれるだけなんだよ。ほんとには迷惑^{めいわく}!』

あの言葉が聞こえていたなんて……。

わたし、サイテーだ。

「ごめんなさい。あの……。」

①ちがうんです、と言おうとしたけれど、言えなかった。

何も、ちがわないじゃないか。

下級生からも変わり者 扱あつかいされている佐藤先輩と、仲よくしていることを周りに知られるのが嫌だった。

わたしまで変わり者のカテゴリー*3に入ってしまうと思ったから。

なのに、二人でいるときは仲よくしたいなんて、b虫むしがいい。

佐藤先輩の気持ちなんて考えていなかった。

「わたし、周りから自分がどう呼ばれてるかなんて知ってるよ。いばって督促を持ってくるから、督促女王。どの教室も、わたしが入っていくと嫌そうな顔をする。」

「わたしは……。」

「いいよ、自分の身を守りなよ。わたしとちがって、中学生活まだまだ続くんだから。居心地ねじこいい寝床ねどこは必要だよ。」

佐藤先輩はくちびるだけで 微笑ほほえんでいた。怖いこわと思った。だってそれは、本当の笑顔じゃないと分かったから。

昼休みだけじゃない、②何かもっと大事なものの終わりのような予鈴よれいが鳴る。

「それじゃあ。」

佐藤先輩はわたしの横をすり抜けた。

「じゃあ七海*4さん、戻りますね。」

「お疲れさま。今日はもう一人の当番の服部はっとりさん来なかったわねえ。」

「来週はサボらないように言っておきます。」

佐藤先輩と七海さんのやり取りが耳に届く。

わたしも教室に戻らなくちゃ。でも、動けない。

そのとき、本棚ほんだなに並んでいる一冊が目に留まった。

何だか 懐なつかしさが胸に広がって、それがマレーシアの日本人学校の図書室で読んだ小説だと少し遅おくれて気がついた。

その本を見つめていると、

「あら、花岡さん。もう本鈴鳴るよ。教室戻って……ていうか、どうしたの？」

七海さんに声をかけられた。

「あ、えと、その。これ借りたくて。」

わたしはとっさにごまかし、人さし指をかけて本棚からその本を抜き出した。

この本を胸かかに抱えて目を閉じたら、マレーシアの日本人学校の図書室にワープできればいいのに。

そんなファンタジーの世界のようなことを考えたら、涙なみだが出てきた。

「この本、マレーシアで通った学校の図書室にもあったんです。わたし……マレーシアに帰りたい。」

わたしは日本に帰ってきてから、周りの目ばかりを気にしている。

どうして。どうして。

③わたしは悔くしかった。

飛行機で運ばれる間に、自分の性格が変わってしまったような気がする。

マレーシアはいろんな民族がごっちゃに暮らしている多民族国家だ。

わたしは、マレーシアには東南アジア系の顔の人たちだけが住んでいると思っていた。でも、そうじゃなかった。

電車に乗っても、一つの車両にいろんな人たちがいた。

(中略)

みんなで同じものを持たなくちゃ、同じようなタイムで走らなきゃ、同じものをおいしいと思わなきゃ。

マレーシアに来る前のわたしはそんな思いにとらわれていた。④それは四年生の後半あたりからわたしの胸に蜘蛛くもの巣のように張りついていた。

でもここは、人とちがっていても仲間外れにされちゃうような場所じゃない。マレーシアで、わたしたち兄妹が入った日本人学校もそうだった。

インターナショナルスクールってガラじゃないよね、とか言ってお父さんとお母さんが決めた学校だったけれど、学年の隔へだてはなくて自由だった。

一つ二つの歳の差としなんて気にせず、よく一緒に遊あそんでいた。

なのに、今のわたしときたら。

人とちがうことを怖がって、人とちがうことを否定して。

こんな自分、嫌だ。

「花岡さん。」

とん、とん。七海さんは横からわたしの背中を優しくたたき、

「その本、私も好きだよ。」

ほんわかした口調で言った。

「私が中学生のころに発行された本なの。主人公の女の子に、自分を重ねて読んでた。」

⑤わたしはまじまじと七海さんの顔を見る。

大人の人の年齢ねんれいがよく分からないけど、七海さんはまだお姉さんって呼べるくらいには若い。白い肌はだには少しソバカスがあって、赤いフレームの眼鏡めがねの奥の目がどんぐりみたいに丸くて茶色い。

それでも、この人が中学生のころって、きつと十年以上前の話だ。

「私は、昔から本が好きだったから、休みの日は一日中、自転車に乗って図書館巡めぐりをしてたの。たいていの図書館にその本は置いてあった。それがすぐく心のよりどころになった。嫌なことや悲しいことがあって自分の心がグラグラになっても、その本は私が行く先々で、どこでも同じ凜りんとした姿で図書館にある。それを見ると、安心して、私も自分の気持ちを立て直すことができたの。」

マレーシアの日本人学校の図書室にも、この中学校の図書室にも。遠く離れた場所はなでも、この本は変わらない……。

そういえば、マレーシアの日本人学校に編入したばかりのころ、日本でよく読んでいた本が図書室にそろっていて、何だかほっとしたっけ。

⑥今はその逆だなんて笑ってしまう。

「佐藤さんね、編入してきたあなたのことを気にしてたよ。佐藤さんも転校生だったから、花岡さんの心配や緊張を和らげようとして、それで吟行に誘ったんじゃないかな。ただ、不器用だから、あんな命令口調になつたけど、花岡さんと仲よくなりたかつたんだと思うよ。」

わたしと仲よくなろうと……？

もし、それが本当だったら。単に出席番号が三十一だからだけじゃないとしたら……。

わたしはひどいことを言ってしまった。

そう思ったとき、本鈴が鳴った。

「教室に戻れそう？」

わたしはうなずいた。

教室に戻る途中、埃の転がる廊下を急ぎ足で進みながら考える。

佐藤先輩に謝らなきゃ。

どうにか、仲直りをする方法……。

気持ちを伝えるにはどうすればいい？

月曜日の朝、わたしは三年A組の後ろの扉をそろりと開けた。

佐藤先輩の目印はつややかなロングヘア。教卓の目の前の席で本を開いているのが、すぐに目に入った。

「失礼します！」

思った以上に大きな声が出て、教室にいる人たちの視線がわたしに集ま

る。

怖くない、怖くない。わたしは自分に言い聞かせ、ずんずんと目指す席まで進んだ。佐藤先輩は振り返らないままだ。

「あの、これ！」

わたしはタンカードを渡した。

「何？」

「この間の続きをみてください。わたしの短歌が書いてあります。」

それだけ言うと、佐藤先輩の言葉を待たずに、教室を出た。

⑦わたしの伝えたいことは、あの短歌に託してあるから。

『ジャランジャラン 願いを込めてもう一度いっしょに歩いてみたい道です』
伝わりますように。

放課後、待ち合わせているわけじゃないけれど、わたしは図書室にいた。佐藤先輩に会えるとしたらここだから。

「何？ ジャランジャランって？」

声のほうを見ると、佐藤先輩が本棚に寄りかかって腕組みをしていた。

「ジャランは、『道』。ジャランジャランで『散歩』っていう意味になります！」

来てくれた。

それだけのことがうれしくて、わたしは図書室なのも忘れて大きな声で

答えた。

そして大きく息を吸う。

「ごめんなさいー」

耳にかけていたボブの毛先がぱさりと落ちる。

「わたし、吟行楽しみにしてたのに、なのに、周りにどう見られるか気にして

……。すぐかつこ悪かったです。」

「顔上げなよ、もう気にしてないから。」

「ほんとですか。」

佐藤先輩の顔を見ると、少しきまり悪そうに目をそらされた。

「怒ったりして、大人げなかったかなって。転校生だったら、周りに溶け込

まなきやって思う気持ちも分かるし。」

(中略)

「さて、先週行かなかった分、今日吟行に行きますか。」

佐藤先輩が伸びをした。

「行く！ 行きます！」

「今日は近くの神社でもいいかもね。」

もう図書室の出口に向かって、佐藤先輩は歩きだしている。わたしはやっ

ぱり、この背中が好きだ。

神社に行ったら、何か願いをかけようかな。

やっぱり、早くクラスに溶け込めますように、かな。

(こまつあや「リマ・トゥジュ・リマ・トゥジュ・トゥジュ」より)

なお、本文には省略等があります。(

*1 督促女王……図書委員として、返却期限の過ぎた本がある人に、教室まで

注意をしに来ることにつけられたあだ名。

*2 吟行……詩歌を作るために出かけること。

*3 カテゴリー……同じ性質のものが分類された枠組み。

*4 七海さん……図書室の司書。

*5 出席番号が三十一だから……以前、佐藤先輩から「吟行に誘ったのは、『わ

たし』の出席番号が短歌の音数(五・七・五・七・七)と一致していたため

だ」と伝えられていた。

*6 タンカード……短歌を書き留めている単語カードのこと。

問一 — 線a「口をとがらせた」・b「虫がいい」の意味として適当なものを、

次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

a「口をとがらせた」

ア 言い訳をした イ 不満そうな顔をした

ウ 知らないふりをした エ 激しく怒った

b「虫がいい」

ア 臆病だ イ 不思議だ ウ 身勝手だ エ 不快だ

問二 — 線①「ちがうんです、と言おうとしたけれど、言えなかった」とあ

りますが、それはなぜですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア 周囲から変わり者だと思われる佐藤先輩と、一緒にいるところ
を見られたくないと思っただのは、事実だったから。

イ 二人でいるときだけは佐藤先輩と仲よくしたいので、これ以上余計
なことを言っつて、悪い印象を与えたくなかったから。

ウ 佐藤先輩の言うことを否定すると、それを聞いた人から、自分まで
変わり者として扱われてしまうと思ったから。

エ 佐藤先輩が表面上は笑っているように見えても、内心では怒ってい
ることに気づき、恐ろしかったから。

問三 — 線②「何かもつと大事なものの終わりのような予鈴が鳴る」とあ
りますが、「もつと大事なもの」とは何だと考えられますか。適当なも
のを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 友達をつくる機会

イ 短歌をつくる才能

ウ 佐藤先輩との関係

エ 居心地いい学校生活

問四 — 線③「わたしは悔しかった」とありますが、何が悔しいのですか。
四十字以内で説明しなさい。

問五 — 線④「それは四年生の後半あたりからわたしの胸に蜘蛛の巣のよ
うに張りついていた」とありますが、「それ」の指す内容はどこですか。

本文中から一文で探し、はじめの五字を抜き出しなさい。

問六 — 線⑤「わたしはまじまじと七海さんの顔を見る」とありますが、そ
れはなぜですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で
答えなさい。

ア 自分が手に取った本を、年の離れた七海さんも心のよりどころにし
ていたことを知って驚いたから。

イ 若いと思っていた七海さんが、想像以上の年齢だったことが信じら
れなかったから。

ウ 落ちこんでいたところに突然話しかけてきた七海さんを不審に思
い、警戒していたから。

エ 佐藤先輩が自分を気遣ってくれていたことを七海さんから聞いて、
衝撃を受けたから。

問七 — 線⑥「今はその逆だ」とありますが、これはどのようなことす
か。次の文の空欄に入る言葉を、五十字以内で答えなさい。
【五十字以内】と思っているということ。

問八 — 線⑦「わたしの伝えたいこと」とありますが、それは何ですか。三
十字以内で説明しなさい。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

そもそもコミュニケーションとは、言葉だけではありません。言葉はコミュニケーション全体のたったの7%といわれています。残りの93%は、声の調子、顔の表情、視線、しぐさ、態度といった言葉以外のもの。僕たちは言葉そのものより、言葉以外のものからずっと多くを受け取って、コミュニケーションをとっているのです。どんなにいいことを言っても、その人が踏ん返り返ってa横柄な態度でいたら、何か信用ができないと感じてしまうのは、そのためなのです。

*₁ SNSでのコミュニケーションのほとんどは、言葉に偏っています。どういう気持ち_こが込められているのか、細かなニュアンス₂を文字から読み取るのは、けっこう難しいもの。人によってはまったく逆の受け取り方をしてしまうこともあるでしょう。①相手の姿が見えないところで相手の身になるというのは、もともと難しいことなのです。

さらにコロナ時代になって、オンラインでのコミュニケーションが一気に進みました。画面越しに顔を見て会話ができたとしても、やはり直接会って話をするのとは違って、相槌がぶつかったり、間合いが取れなかったり、何となく話がかみ合わないような感じがします。特に、初めて話す人はストレスを感じるでしょう。こうしたオンラインでのやりとりは、コロナ後もある程度続いていくことが予想されます。

すると、今後も、SNSやオンラインでの発信力のあることが重視され、②そうした能力をもった人が競争社会でも有利になっていくことは間違いないありません。そうすると、ますます相手の身になる力がbないがしろにされてしまうのではないか。僕はこれをとってもc危惧しています。

相手が見えないと言葉は凶暴になる

コミュニケーションは、キャッチボールです。ボールを投げて取る、取っては投げる、この繰り返して相手のことが少しずつわかってきたり、相手と自分の関係性が出来上がっていきます。それには、相手がキャッチできるようにボールを投げなければなりません。①、相手の身になって、相手に伝わるように話すことが必要になります。

けれども、SNSを中心にした現代のコミュニケーションは、キャッチボールではなく、③自分がいかにすばらしいボールを投げるかに終始しているように思えます。もともと不特定の相手に発信するSNSでは、誰にボールを投じているのかきえあいません。

自分が発した言葉に、誰かが「いいね」を返してくれたら、自分という存在も認められたような気分になります。この気持ちは僕もわかります。自分の言葉をわかってくれる人、賛同してくれる人の存在はとてもうれしい。そして、もっとおもしろいこと、もっと過激なことを書いてやろうというふう
にエスカレートしていきます。ある意味楽しい気分になりますが、その言葉

を受け取る相手のことまで考えている人はあまり多くはないでしょう。

(中略)

子どもたちの世界でも、LINEで悪口を言われた、グループLINEから自分だけ外されていた、といったいじめが横行していると聞きます。小中学校の子どものいじめ認知件数は61万2500件と過去最多を記録しました。インターネットやSNSによるいじめも増加していて、約1万8000件が報告されています(文部科学省「2019年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」)。

ネットやSNSによる言葉の暴力は24時間どこにいても続くので、逃げ場がありません。しかも何がきっかけでターゲットにされるかわからない。大人も子どもも、そんな生きづらい社会に生きています。

誤解のないように言いますが、僕はSNSが悪いと言っているわけではありません。SNSという難しいコミュニケーションツールを使いこなすには、もつと相手の身になる力を身につけなければ、SNSという道具に振り回されてしまうとやりたいのです。

相手の身になる力は何を変えるか

相手の身になるということとは、相手に興味をもつということです。自分のほうから興味をもつと、たいていは相手もこちらに興味をもってくれます。それがきっかけで、お互いに話ができたり、わかり合えたりします。そう、

相手の身になることは、人と仲よくなる近道なのです。

人にアピールする特技やすぐれたところがないと、友だちはつくれないのではないか。そんなふうに自信をもてないでいるかもしれないですが、それは大きな誤解です。自分のほうから相手に興味をもつこと、そして、相手の身になってみることで、人との距離を縮めることができるのです。

相手の身になるということは、自分とは違う考え方、知らなかったことと出合うことでもあります。視野が広がり、自分が思っている「あたりまえ」があたりまえではないことにも気づかせてくれます。世の中にはいろんな考え方があつて、常識は一つじゃないと気づくことは、人間として豊かに成長していく上で欠かすことができません。

これから多様性の時代になるといわれています。多様性とは、いろんな個性、いろんな考え方をもちた人たちが、それぞれ認め合いながら一緒に生きていくこと。④そんな多様性を大事にする社会では、相手の身になる力がないと生き抜くことができないと僕は思っています。

□、最も大切だと思うのは、暴走を防ぐブレーキとしての力です。コロナ禍であらわになったように、残念なことですが人間には人を誹謗中傷したり、言葉の暴力を振るう嫌な一面があります。けれど、相手の身になる力があれば、その方向に流されそうになる自分にブレーキをかけることもできるのです。お互いに傷つけ合うのではなく、声をかけ合う、気遣い合う、助け合うことで、僕たち自身が生み出している「生きづらき」

はずいぶん解消されるのではないのでしょうか。

現代は、コンビニがあり、ネットで世界中の人とつながることもでき、ある程度、条件を整えば一人でも生きていける仕組みになっています。自分のことだけ考えて生きていくことも可能かもしれませんが。【目】それだけでは幸せには生きられない。一人だけでは心が満たされないことに、みんなが気づき始めています。

相手の身になる力は、人とかかわりながら、だんだんと身についていけます。その大切さに気づくことができれば、もともとと伸ばしていくこともできるでしょう。今まで何となく見過ごされてきた、古くて新しい「相手の身になる力」。新しい自分を発見するために、「生きづらさ」を解消するために、人や社会とつながって生きていくために、相手の身になる練習を始めましょう。

(鎌田 實『相手の身になる練習』より。なお、本文には省略等があります。)

*1 SNS……インターネット上でコミュニケーションをとれるサービス。LINE やインスタグラムなどがある。

*2 ニュアンス……言葉の意味・色合い・音の調子などの、他と違う微妙な特色。

*3 オンライン……インターネットなどのネットワークにつながっている状態。

問一 ――線a「横柄な態度」・b「ないがしろにされてしまう」・c「危惧して」の意味として適当なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

a「横柄な態度」

ア 偉えらそうな態度 イ 意地悪えらそうな態度

ウ 疲れたつかような態度 エ あきれたような態度

b「ないがしろにされてしまう」

ア 減へらされてしまう イ 重要視じゆうじやうしされてしまう

ウ 軽かろんじられてしまう エ 忘れわすられてしまう

c「危惧して」

ア 予測よそして イ 期待きたいして ウ 悲観ひかんして エ 心配しんぱいして

問二 ――線①「相手の姿が見えないところでもともと難しいことなので」とありますが、なぜですか。その理由を説明した次の文の空欄に入る言葉を本文中から探し、それぞれ指定の字数で抜き出さない。私たちは、声の調子、顔の表情、視線、しぐさ、態度などの【1七字】から多くの情報を受け取って、「コミュニケーションをとっているため、【2二字】に偏へんっているSNSのやりとりから相手の気持ちを読み取るのは難しいから。

問三 — 線②「そうした能力」とは、何を指していますか。本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問四 ア・イ・ウ に入る適当な言葉を、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり イ そして ウ しかし エ または

問五 — 線③「自分がいかにすばらしいボールを投げるかに終始している」とありますが、どのようなことですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不特定の相手にどうしたらうまく伝えられるかばかりを考え続け、自分の功績だけを追究すること。

イ 相手が驚くような勢いのあるボールを投げるためにはどうすればよいかばかりを考え、受け取りやすさを考慮していかないこと。

ウ 誰かに「いいね」をもらって存在を認めてもらうことばかりに一生懸命になり、相手の顔をうかがうこと。

エ 面白いことや過激なことを発信することばかりに気を取られて、受け取る相手のことまで考えていないこと。

問六 — 線④「そんな多様性を大事にする社会」とありますが、それはど

のような社会ですか。本文中の言葉を使って、四十字以内で答えなさい。

問七 次の会話は本文について、二人の中学生が話している場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

A: コミュニケーション全体のうちで【1 二字】によるものは、たったの7%だなんて驚いたよ。

B: そうだね。確かに、筆者が書いているように声の調子とか表情、しぐさで相手の気持ちを読み取ることで多いよね。

A: そうそう。LINEとかでやり取りしていると相手の意図がよくわからない時があるよね。声が聞けないし、表情も見えないから、怒ってるのかどうか判断できないときがある。

B: うん。それで友だちとけんかになりそうになったことがある。【2 八字】を文字から読み取るのが難しいっていうのを実感したよ。

A: 「人によっては【3 十一字】をしてしまうこともある」っていうのも同感。だから、文字でコミュニケーションをとるSNSは使わない方がいいんだよ。

B: うーん、SNSそのものが悪いわけではないと思う。その難しいツールを使いこなすには【4 七字】力をつける必要があるんだよ。その中でも、人を誹謗中傷したり、言葉の暴力を振るうような方向に行きそう

になったときに、その【5 九字】としての力になることがもつとも
大切だと言って言っているんだよ。

A:相手の身になるって大事なんだね。そうすることで、新しい自分を発見
したり、「生きづらさ」の解消につながったりしていくんだ。

(1) 【1】〜【5】に入る言葉を本文中から探し、それぞれ指定の字数で抜き
出さない。

(2) 線「新しい自分を発見したり」とありますが、「新しい自分を発見」す
るとはどのようなことですか。解答欄に合うように、本文中の言葉を使
って、四十字以内で答えなさい。

相手の身になることで、【四十字以内】こと。

